

幼児は語学の天才

ドーマン：これは、どういうことかと申しますと、つまり、幼児というのは語学の天才である、ということなのです。皆様も、これは、もうよく御存知のことなのです。

もし、2 か国語を話している家庭に赤ちゃんが生まれれば、赤ちゃんは、普通に二か国語を話すようになります。

ブラジルで、私は、小さい小さい坊やに会いました。私がひねりつぶせば、ひねりつぶせるような小さい坊やが、9 か国語をスラスラと話していました。

その坊やは私に「ドーマン先生、私の英語は、学校で習ったものですからあまり上手でなくて相すみません」といったのです。それをイギリスのオックスフォードの訛でスラスラといったのです。私は北フィラデルフィア地方の訛がありますので、全く、面子がつぶれてしまいました。

どうして、こういうことが可能なのでしょうか。それは、すべて脳の中に起こる奇跡ということが出来ます。人間の脳の中では、こういう特定なことが、起こるのですが、それでは、どういう特定のことが、人間の頭脳の中で起こるのでしょうか。

赤ちゃんは自分で習う

アメリカでは、子供たちには英語を教えるのだと私達自身、信じ込んでいます。しかし、これは本当のことではありません。木当のところ、私達が子供に教えるのは“ママ”“パパ”、それと“イ

ヤ”という 3 語だけです。あとの百万語、または、それ以上の言葉については、子供たちが自分で習うのです。

私たちは、赤ちゃんに向かって「これは、眼鏡だよ」ということは決してありません。私たちがいうのは、「眼鏡を持ってきて」とか「私の眼鏡の上にすわっちゃいやよ」とか「その眼鏡をとって」などという言葉です。

普通の赤ちゃんは、このようにして、眼鏡とはどんなものかを習っていくのです。

子供にとって、グラス(眼鏡)という“音声”と眼鏡という“もの”とは、あまり関係がありません。なぜなら、日本語では「眼鏡」、英語では「グラス」といいます。同じものでも音声が全く違うわけです。これは、英語では「グラス」といえば眼鏡のことを指すという、ただ、ちょっとした約束なのです。

眼鏡というのはどういうものかを、子供に教えるときを考えてみましょう。最初、「眼鏡」という言葉が子供の耳に入ります。耳は、聞くことだけです。耳は、ただ、肉の固まりでしかありません。それを理解することはできません。耳から入った言葉が神経を通じて脳に通じます。これが重要なところです。耳の中で、「眼鏡」という言葉が科学的な刺激となって、それが、耳を伝わって、頭脳に入っていくわけです。頭脳は、それを理解します。けれども、頭脳に聴覚というものはありません。

つまり頭脳が聞いているわけではありません。頭脳そのものは全く闇の世界なのです。

頭脳は、音を聞きません。しかし、科学的な刺激を受けることによって、自然に眼鏡という観念を理解するのです。